

岩田彩志（2020年度日本英語学会賞（著書）受賞）

この度は拙著 *English Resultatives: A Force-Recipient Account* (John Benjamins, 2020 年) に対して、栄誉ある日本英語学会賞（著書）を頂きまして、誠にありがとうございます。まずは、選考委員会委員と審査をしていただいた方々、どうも有り難うございました。非常に長い本なので、本当に読むのは大変だったと思います。それから、私の母校である筑波大学の故安井先生、中右先生を始めとする先生方、廣瀬さんを始めとする多くの先輩・同輩・後輩に感謝したいと思います。自分の土台ができたのは、筑波で過ごした学生時代であり、何冊本を出そうが、どんなに認められるようになるだろうが、この事実が変わることはありません。

実は私はかつて *resultative* はまずやりたくないトピックだと思っていました。理由は簡単です。あまりにも書かれた論文や本が多くて、それを読むだけでも一苦勞。しかもそれらの先行研究とは違うことを言わなければならない。「あんなことやる人の気が知れないな」くらいに思っていました。ところが2003年の多分春休みだったと思います。*The door swung open* という文を見ているうちに、「あれ、これはこういうことじゃないのかな」と気づくことができました。それがきっかけとなって *resultative* について考えるようになりました。さらに考えていくうちにどんどん広がって行って、程なく「これは本になるな」と確信するようになりました。

だから実質15年くらい考えて行って、それから原稿を John Benjamins に出して *referee* のコメントを基に書き直して出版されるのに、さらに2年くらいかかっています。15年もかけたと聞くと、「よく、そんなにやるな」と皆さんは思われることと思います。でも私に取っては、それほど特別なことではありませんでした。なぜかと言えば、私が *resultative* とは何かが分からなかったから。そして「どうしてなんだろう？」とっていたから。*Resultative* についてまだまだ分からないことが多く残っており、私が知りたいと思っていたことを明らかにしてくれるような先行研究は (Goldberg 1995, Boas 2003 を含めて) ありませんでした。

という訳で、思いがけず *resultative* に取り組むようになってから、常に「どうして下位範疇化されない目的語が許されるんだろう？」と「どういう時に *resultative* が OK になるんだろう？」という疑問が意識にありました。自分が納得できる答えがなかなか見つからなかったけれども、ある時にふと「下位範疇化されない目的語とは、要するに *force-recipient* のことじゃないか」と気づきました。一生懸命にやっていたので、神様がちょっとだけヒントをくれたのでしょう。そのアイデアをさらに追求して行って、ようやく「これで一通りは終わったかな」と思った時には15年経っていたという訳です。

要するに、研究とはやはり「分からない、どうしてなんだろう？分かってほしい！」から始まって、そしてそこに戻っていくのでないか、ということです。私に言わせれば、研究とは頭の良さでやるのではなく、「分からないから、どうしてそうなのかを知りたくてやる」ものなのです。でもこの当たり前のことが、最近では忘れられていることが多いような気がします。若手の人たちには、もう一度この原点に立ち戻って欲しいと思います。

今回の *resultative* の本は、質・量ともに文句なしに私のこれまでの研究では *the best* です。しかしいつの日か、「あの本は *one of the best* だ」と言えるようになりたい。それがいつのことになるかは分かりませんが、その日を目指してまた頑張っています。そうすることが英語学の発展に貢献することになるとと思いますので。